



園だより 6月号

新宿区立西戸山幼稚園 令和6年5月31日発行



魔法の棒

—もの・ひと・ことと出会って—

園長 佐藤 淳穂

今日も飼育ケースの蛹がアゲハチョウになりましたが、いつもと様子が違います。片方の羽が広がらないのです。「お腹がすいているかもしれない」と心配する子どもたちと一緒に花壇に放すことにしました。マーガレットの花に乗せると触角がピンと動きました。

3歳児のAさんが保育室で泣いていたので、チョウを見に行こうと誘いました。テラスに出ると、Aさんはぴたりと泣き止んで縮んだ羽のチョウをじっと見ていました。そして急に立ち上がると、保育室に一目散に走っていきました。

どうしたのかと気になって、小さなAさんの後をついていきました。Aさんは担任が製作ワゴンに入れておいた丸めた広告紙の棒を手に取り、棒の先端に棚にあった桃色のハート型の画用紙をテープで貼り付けると、急いでテラスに戻りました。そして、そのハートの棒をチョウに向けたのです。棒の先からは、元気になるビーム光線のようなものが出ているに違いありません。さらにAさんはチョウに向かってハートを上下に動かしました。やさしい風が縮んだ羽をゆらゆら揺らしました。

Aさんがチョウに棒を向ける様子を、そのすぐ横で4歳児のBさんが見ていました。ファンタジーの世界に生きる3歳児なりの思いを、ついこの前まで3歳児だったBさんは理解しているのだと思いました。そのBさんとはいうと、水を入れたカップを持っていました。チョウに「水を飲ませてあげたい」というのです。

ずいぶん長い時間、クラスの違う二人はそこで過ごしていました。二人を惹きつけるチョウの魅力を感じるとともに、思いつきを行動に移すことのできるゆったりとした時間や環境が大切だとあらためて思う場面でした。

園のあちこちで、誰かと誰かが出会い、物語を紡いでいます。「はい、Cくんの好きなトーマスだよ」と丸めた画用紙を差し出すDさん。ちらっと見てそれをポイッと投げるCさん。気を引こうとするDさんとそっけないCさんの一方通行の関わりに見えますが、数分後には二人で手をつないでいるのに笑ってしまいました。子どもたちは自分たちの世界を全力でつくっています。